

# A組も「死のグループ」



**プロの目**  
李 国秀  
波乱の幕開けは、今回のW杯自体が波乱に満ちた大会になる。という予兆だらう。何が起るかわからない。これから

1か月の間は大きい楽しみがあった。フランスの敗因はいろいろある。開幕戦などは慎重な試合運び、直前まで続いた欧州リーグの疲れ、シダンの代役を務めたシヨルカエフのミス……。しかし、ここででは、フランスの敗因をあれこれ取りさたするよりも、この試合によって、A組も「死のグループ」になったこと、同じようなこととは他の組にも起りうることを指摘したい。

敗れたとはいえず、フランスは王者らしい統一感を見せていた。同点に出来なかつたのは、ちょっとしたかみ合わせの悪さに過ぎない。得点差はわずか1点だけに、慌てず、騒がず、2戦目まで立って直してやるはずだ。セネガルは

ボールをよく動かすパスのチームだが、抜群の身体能力をいかにし、個人の力で局面を打開してくる。先制点の場面で突破を見せたディウフのスピードは素晴らしい。大会を通じて、注目される存在になりそう。そして、デンマーク、ウルグアイも、侮れない存在である。ここは間違いない。どこが抜け出るか、読めなくなつた。

そして日本のH組にも韓国のD組にも波乱が起きては不思議はない。(元ヴェルディ総監督)

# 対照的な持ち味発揮



**プロの目**  
李 国秀  
規則正しい

思いやる情らしいほごう所属。セリエAの強豪は、まは見せたものの、規律さが素晴らしい選手を欠く。抱えている。デンマークのせいかもしれないが、南米のチームは個人の力はある。規則正しさや、ウルグアイの南米と欧州のプレースタイルの異なる点がある。南米でも、ブラジルとアルゼンチンは、さすがに、なぜボールを出すのかははっきりしている。デンマークで特に光っていたのは、センターバックのラーセンである。高さ、速さがあり、メンバー表を確かめると、ACミランの

の違いがよく現れていた。デンマークは、攻撃に移ったとき、ボールをいつ、どこで、なぜ、出すのかが徹底されていた。これが規則正しさだ。

一方のウルグアイは、球際のプレーに、「おっ」と

思わせる情らしいほごう所属。セリエAの強豪は、まは見せたものの、規律さが素晴らしい選手を欠く。抱えている。デンマークのせいかもしれないが、南米のチームは個人の力はある。規則正しさや、ウルグアイの南米と欧州のプレースタイルの異なる点がある。南米でも、ブラジルとアルゼンチンは、さすがに、なぜボールを出すのかははっきりしている。デンマークで特に光っていたのは、センターバックのラーセンである。高さ、速さがあり、メンバー表を確かめると、ACミランの

の違いがよく現れていた。デンマークは、攻撃に移ったとき、ボールをいつ、どこで、なぜ、出すのかが徹底されていた。これが規則正しさだ。

一方のウルグアイは、球際のプレーに、「おっ」と

# わくわくするサッカー



**プロの目**  
李 国秀  
光州の人は

光州の人は、バレロン、槍のような才能に恵まれた選手があふれた。才能があふれた選手がそろそろスペインのサッカーを自らの当りにできた。アイデアが豊富なラウル、中盤のクッションとなる。次にどんなプレーが飛び出すか、見ていてわくわくするのがスペインだ。

一方のスロベニアは、一本調子で、旧東独のサッカーを連想させる。ドイツ・ブンデスリーガのカイザー・スラウテルンで活躍する左ストッパーのクネウスら、所々に面白いプレーを見せてる選手もいるが、スペインのようなリズム感はない。グループリーグを勝ち抜いていくのは、難しそうだ。

韓国代表は、どろろかといつと、スロベニアに近い特徴を持つ。光州の人たちは、見慣れたチームに近いスロベニアとスペインとを直接比較しながら、「まあ、まあ、サッカーもあるんだ」と、新鮮な感想を持ったのではない。特に子どもたち

ちが、ラウルのような才能のきらめきを見ることができたのは、大変うれしい。スペインのサッカーは、とにかく面白い。今後が楽しみになってきた。

(元ヴェルディ総監督)



プロの目 李 國秀

ブラジルは、間違  
いなく優勝候補の一  
つだ。昨年までのた  
らしないブラジルか  
ら、よみがえってい  
る。その象徴が、け  
がに苦しんできたロ  
ナウドの復活だ。自  
分の形になった時  
のうまさ、速さ、強  
さは、チーム全体の  
組み立ての始まりと  
なるボジションだけ  
に、エースの不在が  
ブラジルの不調の一  
因だったことは、間  
違いない。それだけ  
ではなく、ブラジル  
が南米予選などで苦  
しんだのは、時差が  
あり、気候の違う欧  
州のビッグクラブで  
、主力が活躍してい  
ることが大きい。リ  
バウド（バルセロナ）  
やロベルトカルロス  
（レアル・マドリッド）  
は、つらかっただ

### 人材の宝庫 やはりV候補

ろ。しかし、準備期  
間さえあれば、これ  
までの不調が嘘のよ  
うな試合を見せるの  
だ。印象的だったの  
は、人材の宝庫らしく  
、相手との駆け引き  
でいろいろの形を試  
みていたことだ。ロ  
ナウドとリバウドは  
、前半はトップで、  
後半はリバウドがや  
や下がってリズムを  
変えた。相手が疲れ  
てくると、ドリブラ  
ーのデニウソンが入  
った。また、秘密兵  
器があるのではない  
か。そんな予感も抱  
かせてくれる。トル  
コは、ブラジルを目  
覚めさせたが、冷静  
さを失って、引き分  
けられなかった。短  
気は損気。逆に言  
えば、そのような精  
神状態にさせるほど  
特別な試合が、W杯  
の初戦なのだ。  
(元ヴェルディ総監督)



プロの目 李 國秀

韓国が、欧  
州の裏を漂  
わせた。  
泥臭く頑張  
るスタイル  
から、例え  
ば、DF陣は  
守りに力  
任せに行く  
のではなく、  
相手の様子  
を見ながら  
、対応でき  
るようになって  
いる。本場  
の裏をもち  
ろ

## 「ヒディング流」開花

ん、オランダ人のヒ  
ディング監督である。  
ヒディングは、適材  
適所の配置で、選  
手の力をうまく引  
き出していた。セ  
ンターフォワードに  
、高さが相手DFの  
裏を突くスピード  
がある黄善洪と、テ  
クニックがあり判  
断力に優れる安貞  
桓の二人を持ち、  
後半早々に交代さ  
せた。ゲームプラン  
通り、ヒディングは  
、ディンクの準備  
は、一晩にして英  
雄にもお払い箱に  
なる。ヒディングの  
準備は、夜の勝利  
のために進められ  
てきたのだ。黄善  
洪の先制点には、

山のスタジアムが  
揺れた。内容も、  
圧勝だった。この  
夜の勝利は、韓国  
サッカーの始まり  
である。韓国サ  
ッカー界は、また  
多くの問題を抱  
えている。しかし、  
なぜ欧州のポー  
ランドに勝つこと  
ができたのかを  
検証して、前に進  
むことができる。  
(元ヴェルディ総監督)



プロの目 李 國秀

### スター軍団打つ手なく？

米國には監督が  
いたが、ポルトガル  
はスターがい  
るだけだった。  
立ち上がった  
りから戦う集  
中力に欠けたポ  
ルトガル

は、3点を奪われ  
るまで目覚めず、オリ  
ベイラ監督は  
何も手を打た  
ないまま漫然  
と90分を過  
した。一方、  
米國のアリー  
ナ監督は、ポ  
ルトガルを奪  
って一列目に  
運ぶというコ  
ンセプトを徹  
底させていた。  
さすがに戦  
いぶりだった。

開幕のフランス  
ーセネガル戦に  
続く番狂わせ。  
やはり、W杯は  
グループリーグ  
初戦の戦いが  
難しい。優勝  
を目指すチ  
ームは、初戦  
からトップギ  
アに入れる  
わけにはいか  
ないが、対戦  
相手は優勝  
候補に一泡  
吹かそうと狙  
っているから  
だ。

これで、D組  
も厳しいグ  
ループになった。  
10日の韓国  
ー米國戦が  
楽しみになっ  
てきた。韓国  
は最低でも引  
き分けなくては  
ならない。ポ  
ルトガルが立  
ち直ると、得  
失点差で決勝  
トーナメント  
に進出する  
チームが決  
まる可能性  
が出てくる。  
水原には、  
韓国のヒディ  
ング監督が  
来ていた。彼  
にとっては、  
4日の勝利を  
忘れ、10日  
の試合に備  
えるための  
いい収穫に  
なったので  
ないか。  
(元ヴェルディ総監督)

2002'6.7.

# フランス、16強へ実力十分



**プロの目**  
 李 国秀  
 フランスとウルクアイ、双方が持ち味を出した、見応えのある試合だった。

フランスとウルクアイ、双方が持ち味を出した、見応えのある試合だった。アンリが退場してからのフランスは、10人で戦っているとは思えなかった。プティ、ピエラがフランスを整えた。途中出場のカンテラは、相手の速さを消していた。惜しむらぬは、やはりジダンの代

一方、ウルクアイのペア監督は、疲労が見える選手を次々と代えながら、しっかりと守って素早いカウンタ―で攻めるといふ戦術を貫き通した。監督同士の駆け引きも、見事だった。しかし、10人でもフランスを崩さないフランスは、やはり、グループリーグで敗退するようなチームではない。ジダンの復帰が待ち遠しいが、デンマークに2点差をつけて勝てるだけの力は、十分あるはずだ。  
 (元ヴェルディ総監督)

2002'6.8.

# 今度こそ「無敵」?



**プロの目**  
 李 国秀  
 ベニアを下したスペインが、タイプのパ連ウ南米のラグアイに対しても持ち味

を發揮した。個々の技術の高さが、グループの関連性に結びつき、チームとして徹底されているからだ。さすがである。

初戦でスロベニアを下したスペインが、タイプのパ連ウ南米のパラグアイに対しても持ち味を發揮した。個々の技術の高さが、グループの関連性に結びつき、チームとして徹底されているからだ。さすがである。

3戦目は、どこが決勝トーナメントに出てくるかをにらみながら、準備にあてることができる。カマチヨ監督のプラン通りだろう。それにしても、これほどチームワークの良いスペインは初めて見る。ますます今後が楽しみになった。  
 (元ヴェルディ総監督)

2002'6.9.

# 「ミルチノビッチ流」貫いたが



**プロの目**  
 李 国秀  
 中国のミルチノビッチ監督は、自らの哲学を王者・ブラジルにぶつけていた。

ただ放り込むだけの、単調な戦法は取らなかった。立ち上がりからボールをつなぎ、果敢に攻めた。サッカーは、こういう競技なんだと、選手たちに経験させ、伝えたかったのだらう。

中国とブラジルの違いはまず、選手がボールを持ったときに、2つ以上の選択肢があるかどうかだ。中国の選手は、見えてパスをするという予測がつくが、ブラジルの選手は、パスをするのか、ドリブルをするのか、予測がつかない。それに、中国の選手は、確かに速くて強いが、持っているのは陸上選手のような速さだ。ただ速いだけでは、目が慣れてしまう。ブラジルの選手は、3段ロケットのように、ぐいぐいと出てくる。サッカーに必要なのはブラジルが持っているような球際の速さなのだ。

大敗は悔しいだろう。しかし、中国は、初めてアジア予選を勝ち抜き、サッカーの国際舞台に登場したのだ。王者を相手につなぐサッカーで挑むミルチノビッチの哲学は、素晴らしい。これからは、素晴らしい。長しさをかみしめながら成長していくのだらう。この夜、濟州島で得た経験が、前進につながるはずだ。  
 (元ヴェルディ総監督)



プロの目 李国秀

流れが悪い時に個人の方で打開しようとする、韓国 の弱点が出て しまった。ボールを持つ った相手に対し、ポーランドは 当たりて来たが、米 国は距離を保ってパスカットを試みてきた。こういう戦術には、縦に速いパスを送り、2、3人でアタックする のが有効。しかし、この

### 個人技頼る弱点露呈

日の韓国は、ドリブルをし、 次のポルトガルとの戦いでは、ファウルで止められ、 は、決勝トーナメントをかけたパスを出してはカットされた。これでは、スピードで、ポーランドを相手に乗れないし、相手のリス グループとしての関連性でムを崩せない。 パサーの朴智星が前半に けがで下がり、交代でドリブラーの李天秀が入った 影響も大きかった。初戦に勝って、ホスト国の責任や大観衆の期待を改めて感じ たのが、重い荷物を背負っ たように動きも鈍かった。(元ヴェルディ総監督)



プロの目 李国秀

試合終了の笛が鳴り響いた瞬間、 フランスのピッチにヨルカエフと ミラーがいたのは、皮肉だった。 2人はジダンの代役として、 それぞれ初戦と第2戦に出場したが、 ヨルカエフはミス、ミラーは不出来 で、敗退のきっかけを作った。 フランス敗退の原因をあれこれ探すと なるなら、けがなどでジダンを欠いた場合のオプシ ャンがなかったことであり、選手選考に絶対の権限 を持つルネール監督のキヤスティングミスだ ろう。例えば、昨年のコンフェデレーションズ杯で 活躍したカリエールのような選手を呼ばなかつ たのか。前回優勝

### ジダンの代役 ミスカヤスト

チームとして、4年間の準備期間があり、 いろいろ工夫したのだろうが、結果が伴わなかつた。 フランスが、日本で試合をしないまま、 W杯の舞台を去ってしまうのは、残念で ない。おかしなところかもしれないが、 フランスのサッカーは、上質の音楽を連想させる。 体を寄せてボールを奪うビエラの技術は世界一だし、 ジダンの視野の広さはまるで目がいくつも付いて いるようだ。素晴らしいリズムとハーモニーを奏でる彼らを目の当たりにすることで、日本の皆 さんにも、サッカーの美しさを理解して いただけたらと思う。フランスだけ ではなく、日本のためにも、失 望を味わっている。(元ヴェルディ総監督)



プロの目 李国秀

南ア飛躍には「賢さ」育成 アフリカ勢 ないがある。スペインの 選手は速くて賢くてうまい。賢いとは、二つ二つ 意味のあるパスを出せるか どうか。例えば、スピードを 上げるための準備として、 横にゆっくりとしたパスを 展開できるかどうか。言い 換えるなら、ボールが動く のがスペイン、人が動く のが南アフリカである。 サッカーにける賢さとい うのは、育成段階で身に つくもので、スペインなど 欧州の強豪は、共通して持 っている。前回大会で現日 本代表のトルシエ監督が南 アフリカを率いたように、 アフリカの代表チームは近 年、欧州の指導者を招いて 組織力を高めた。しかし、 フル代表の年代に達 してからは、賢さは身に つかない。アフリカ諸国の 代表選手が、欧州の一流ク ラブで活躍できるのは、個 人の能力が高いからだ。 経済的な問題は承知して いるが、早くから賢さを身 につけた選手が育ってくれ ば、世界の強豪に仲間入り するだろう。アフリカのチ ームは、我々に育成の大事 を教えてくれるのだ。(元ヴェルディ総監督)

試合終了の笛が鳴り響いた瞬間、 フランスのピッチにヨルカエフと ミラーがいたのは、皮肉だった。 2人はジダンの代役として、 それぞれ初戦と第2戦に出場したが、 ヨルカエフはミス、ミラーは不出来 で、敗退のきっかけを作った。 フランス敗退の原因をあれこれ探すと なるなら、けがなどでジダン

2002'6.14.

# 日本にとって戦いやすい



決勝トーナメント本にとっては戦いやすい相手だろう。

## プロの目

メンター回戦で日本と顔を合わせる可能性はあるトルコは、選手一人一人が非常にポストプレーでテンポを調整し、ハッサンが飛び出してきた。

にタフでたくましいチームだ。しかし、ムラツキもあるので、統一感で上回る日

2002'6.16.

ンは、横浜Mのウィルに似たタイプ。ハッサンのように、トルコはリーグの外国人と特徴が共通する選手が多く、日本代表は見慣れた印象を受けるはずだ。守備では、センターバックのビュレントと、ボランチのトゥガイが、前に出てくる場面が多かった。センターバックとボランチが、しっかりと三角形の距離を保つと崩れにくいのだが、この形が乱れるために、前線にスペースが生まれる。中田英を起点に森島が飛び出している。トルコと中国との試合を見ながら、そんな場面を想像した。

稲本や戸田らのミドルシュートも有効になりそうだ。注意点としては、不用意なフアウルでFKの機会を与えないこと。ハカンシユキルの高さが生きてしまう。また、途中から出場してくるイルハンは、非常にパワフルで、流れを変えることができる。ブラジルのDFも手はずついていた。決勝トーナメントに出てくるようなチームは、こうした選手が必ずいるものだ。トルコは日本ががっぷりの相撲を取れる相手。トルシエ監督のゲームプランを楽しみにしている。

いよいよ、決勝トーナメントを迎えた。W杯のどきどきを味わうことができるのは、これくらいだろう。グループを勝ち抜いた各チームが全開モードに入り、持ち味を出してくるからだ。ドイツ。パラグアイ戦の言葉は、ドイツは、きまじい。パスルを組み立てるようなサッカーをした。対するパラグアイは、守備を重視し、相手をイライラさせながら、一瞬のスキをついて戦術を徹底していた。

## プロの目

負けたら終わりの真剣勝負の中、それぞれのチームが真実の味を味わう。トルコの中から、好みに合うものを探していく。それが決勝トーナメントが、抑揚をつけられるデルビエロの起用法がきになるだろう。

### 少ないサポーター もの足りない熱気

浦会場は、ドイツとパラグアイからのサポーターが少ないのが気になった。いいゲームは、いい施設、いいチーム、いい観客から生まれると思うので、もの足りないのは残念。決勝トーナメントの盛り上がり期待するとき、心配だ。(元ヴェルディ総監督)

2002'6.15.

# 「力任せ」から脱却



## プロの目

個人の力で打開しようとして苦戦した米國戦から、韓国は見事に修正できていた。大声援を受けても決して前がかりにならず、シュートレンジまで持ち込んで、周囲の攻め上りを待つ厚い攻撃が出来ていた。

ハーフタイムに大田の情報が入ったのだから、後半に韓国は戦い方を変えた。一人余った状態を生かし、宋鍾國をフィーゴのマークにつけると、前半は単独でドリブル突破を試みていた。

薛琦鉉は、チャンスメーカーに徹するようになり、盛んにラストパスを送った。このように、グループとしての関連性で柔軟に対応できるのが、ヒディンク監督が、力任せだった韓国の蹴球を、サッカーに進化させた何よりの証である。韓国も念願の16強入りを果たした。次のイタリヤ戦が、試合石になる。強豪を相手にどこまで戦えるか、私自身も楽しみになってきた。(元ヴェルディ総監督)

2002'6.17.

# だらしない スペイン 観客ソツポ



プロの目  
李 国秀

水原の夜は残酷だった。素晴らしいサッカーをしたスペインがW杯の舞台を去り、ひどいサッカーをしたスペインが準々決勝に勝ち残る。何とも言えない結果になってしまった。

スペインのカマチヨ監督は、自らのさい配におぼれてしまったのか。1-0で逃げ切れると思ったのか、モリエンテス、ラウルの2トップをとくに下げてしまいい、惨めな展開を招いた。延長後半には、負傷で動けないルイスエンリケをトップに置いて、かろうじてPK戦に持ち込む始末。スタンド中がアイルランドの応援に回ったのは、だらしないスペインに対するブーイングでもあったはずだ。スペインが、持ち味のうまくて抑揚のあるサッカーを捨ててしまつたら、優勝も韓国のサポーターも逃げていってしまうだろう。(元ヴェルディ総監督)

2002'6.18.

# 粘り強いだけでは……



プロの目  
李 国秀

不思議な8強入りだ。このレベルまで勝ち上がったチームは、どこか見習うべきところがあるものだが、米国にはそれがない。基本は、粘り強い守りからカウンターである。深く守って、ボールを奪ったら素早く前に、という戦術は徹底されている。流れを止めないままもある。だが、守備は組

織的とは言えず、強豪に比べれば見劣りする。だからこそ、カウンターの本来とも言えるべきポルトガルのようなチームには、あっさりと敗れてしまふ。しかし、ポルトガルやメキシコといった個人技のあるチームは、体を張って我慢強く守られているうちに、イラついて逆にペースを乱す。組み合わせに恵まれた運というほかに勝ち上がりの理由を探るなら、そのあたりになるだろう。

(元ヴェルディ総監督)

2002'6.19.

# 高い潜在能力開花



**プロの目**  
李国秀  
合だった。  
会場の大田

W杯スタジアムはサッカー専用で、観客席とピッチがとてに近い。観客は、必死の形相で戦う選手たちを間近に見て、声援を強める。選手たちはその熱を受け、時間を追うごとにプレーが良くなっていった。スタジアムの勝利だとも言えるだろう。大田スタジアムは、バリアフリーも徹底され、韓国会場の中でもナンバーワンと思っていたが、やはり、いい施設はいいプレーを生んだ。  
イタリヤは、ボールがな

敗者は、一  
体でいる  
のだらうか。  
そう言いたく  
なるような試  
合だった。  
会場の大田

アップするスタジアムに、のみ込まれてしまった。終盤、追い込まれた韓国の選手交代は、捨て身だった。次々と交代で入った新しい選手が中盤を走り回ることで、前に強く出るイタリヤの持ち味を奪った。ヒディング監督の勇気ある決

断が、波を引き寄せた。ヒディング監督は韓国の選手が持っていた高い潜在能力を開花させた。ベスト8の資格は十分あると思っ  
ている。準々決勝はスペイン戦。もし「次」があったら、もう番狂わせとは呼べない。(元ヴェルディ総監督)

2002'6.22.

# 米の攻撃、一本調子



**プロの目**  
李国秀  
初々しさとい

速くという一本調子で攻め続けたこと。ドイツは前半、ボールを奪われて相手にカ

このは、縦に  
速くという一本調子で攻め続けたこと。ドイツは前半、ボールを奪われて相手にカ

米国の初々  
しさでは、老  
練なドイツを  
倒すことがで  
きなかった。  
初々しさとい  
うのは、縦に  
速くという一本調子で攻め続けたこと。ドイツは前半、ボールを奪われて相手にカ

数持っているかどうかの差だ。ドイツの選手は、相手をマークしながら先の流れを読んだり、ボールを持った時に、縦にも横にもパスができる。しかし、米国の選手は、相手の守りにまともにもぶつかっては跳ね返され、決定的な仕事をさせてもらえなかった。初々しさで通用したのもベスト8までだったということだ。  
試合途中、韓国の観衆は試合そっちのけで「チーハ(チンギング(大韓民国))」と、連呼していた。試合内容への物足りなさを表していたのではないだろうか。(元ヴェルディ総監督)

2002'6.23.

# 指揮官のプラン通り展開



**プロの目**  
李国秀  
ただらう。  
ヒディング

韓国は立ち上がりから、守りを固め、攻め急がなかった。ペース配分を頭に入  
れ、長い距離を走らうとせず、ギアはローに入れ  
たまま。しかし後半に入る  
と、選手交代でギアチェン

韓国は立ち上がりから、守りを固め、攻め急がなかった。ペース配分を頭に入  
れ、長い距離を走らうとせず、ギアはローに入れ  
たまま。しかし後半に入る  
と、選手交代でギアチェン

スペインのカマチョ監督は、準決勝のドイツ戦を  
にらみ、ラウルを使わずに  
勝つつもりだったはず。こ  
の試合は監督のゲームプ  
ランの激突でもあり、プラ  
ンにはまった時の喜びは何  
物にも代え難い。反対に、  
物にも代え難い。反対に、  
間隔が2日間も少ない。劣  
勢は避けられないところだ  
が、韓国国内の盛り上がり  
を考えると、無残な試合は  
できない。延長PK戦で  
もよしとする判断が、働い  
たことだらう。

アジア初のベスト4進出  
を果たした韓国。ドイツ  
ームは、韓国チームだけ  
ではなく、韓国という国  
そのものを相手に戦うこ  
とになる。欧州の強豪を  
一つ一つ倒してきた韓国  
が、過去3回の優勝を誇る  
強豪をどう迎え撃つか、楽  
しみた。  
(元ヴェルディ総監督)

2002'6.26.

# 痛かったケガ交代

もつと長く、



プロの目 李 国秀

韓国の戦いぶりを見ていたかった。サッカーが90分で終わらないものならば、追いついたかもしれない。そんな気持ちにさせる試合だった。ここまで5試合。韓国は自分たちのペースでゲームを進めてきた。だが、ヒディング監督は準決勝という舞台で、ドイツの強さを認

め、弱点を見極めた布陣を敷いてきた。李天秀、車ドカリというドリブラー二人を先発で起用。高さで挑まず、速いドリブルで相手DF陣を切り裂こうとした。前半を0-0で終えたのは、ヒディング監督の狙い通り。マンツーマンで守ることで、ドイツの運動量を増やさせ、後半勝負に持ち込もうとしていた。柳想鉄もキーマンであるバラックを押しさえ、前半は仕事をさせなかった。

だが、崔鎮喆のけがによる交代が痛かった。今大会を振り返ると、崔鎮喆の存在は地味ながらも絶大だった。高さ(1.87)と1対1の強さを持ち合わせている。崔鎮喆がベンチに下がってから失点したが、その事実を物語っている。

90分間の戦いの中で、選手個々の選択肢が多い分、ドイツに「一日の長」が現れてしまう。優勝3度を誇る国との、育成をはじめとするサッカーの土壌の違いを感じざるを得なかった。

この日の韓国はいい時間帯が今までより短かった。そこがドイツが上回っていた部分なのかもしれない。組織力を生かす自分たちのペースで戦えれば……。もう少し韓国を見ていたかった。(元ヴェルディ総監督)

2002'7.1.

天才ブラジルはまねできないが...

# ドイツはいいお手下本



プロの目 李 国秀

ブラジルは母親のおなかの中でサッカー選手が育つ国。天才が勝負に決着をつけた。さすがにブラジルと言っしかない。持ち味を出したドイツもグッドルーザー(素晴らしい敗者)だった。攻撃は最大の防御とはかりに、前から前から仕掛けていた。指導者としてこの試合を見たとき、ゲームプランそのものはドイツに共感するものがあった。

ただ、フェラー監督は選手交代で一瞬、ちゅうちょしたように見えた。74分にピアホフを投入した時、一緒にツィーゲ(84分交代)も代え、劣勢の流れを引き戻す手もあったのではないだろうか。サッカーにおいて、前半は「序曲」でしかない。後半は、展開をガラッと変えるもの。この大会で、日本のファンも「サッカー」と「蹴球」の違いを改めて認識できたのではないか。日本のサッカーは最初から頑張り、ボールを蹴るだけになってしまっている。ドイツは、選手をしっかりと育成してくる国だ。だから、個々の選手にプレーの選択肢が必ず二つ以上ある。日本が見習うべき点ばかりにそこちゅうちょ。天才が生まれてくる国、ブラジルのサッカーを見習うことはできない。ドイツをグッドルーザーと呼べる理由が、そこにある。(元ヴェルディ総監督)